

目的 現代の日本住宅の採光は、あまりに単一的に「明るさ」のみが指向され、反面、「明るさ」の持つ意味や価値について無頓着となり、生活自体が無味乾燥化する傾向が窺える。今一度、現代の住宅内採光を見直す必要があるのではないか。そこで、現代の問題点の発生に直接的に関連している、開国以後の近代住宅の採光の歴史をたどることにより、問題点自身を的確に見極め、それをもとに将来への望ましい方向づけを得ようと試みた。

方法 住宅の採光が、住まい手の生活思想、衛生意識、美意識等を総合した「採光観」と、それが実際の形となって現出される「家屋」の二面より成立している、との認識の上に立って考察を進め、具体的には、その採光観が集約的に家屋の中に現われる「南面化に対応する部屋の配置」と、直接的に採光を行なう「開口部のあり方」の両者の変化発展を追って、統一された全体像としての住宅内採光の歴史を通観した。また、その研究手段としては、当時の住宅書、家政書、建築関連雑誌等を中心とする文献考察の形式をとった。

結果 近代住宅の採光のたどった歴史の中に、現代住宅の持つ採光の問題点が如実に提示されており、真に現代はその直接の延長上に立っているのであるが、第一報で扱う①明治中期以前、の住宅内採光は、接客中心の生活思想によって家族室が冷遇され、かつ、採光面も低く、光力も弱く、さらに、一般への衛生意識の普及、ガラスの導入等のみられない、暗く不衛生な時代、②明治中後期～大正初期は、生活思想の変化に伴う居間の南面化への動き、開口部へのガラスの導入の開始、さらに採光の衛生上の意識の普及等、精神面でも物理的機能面でも、住宅が明るさを求めて始動しはじめた時代、であった。